

大田市民会館文化講座 「朗読で楽しむ名作・古典」 テキスト

『平家物語 卷十一』より

那 須 与 一

さる程に、阿波、讃岐に平家を背いて、源氏を待ちける兵ども、あそこの嶺、ここの洞より十四五騎、二十騎ばかり馳せ来るほどに、判官程なく三百余騎にぞなりにける。

「今日は日暮れぬ。勝負を決すべからず。」

とて、引き退くところに、沖より尋常に飾つたる小船を一艘、汀へ向いて漕ぎ寄せけり。渚より七八段ばかりになりしかば、舟を横様になす。

「あれはいかに。」

と見る所に、船の中より年の齢十八九ばかりなる女房の、柳の五衣に、紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出だしたるを、船のせがひにはさみ立てて、渚へ向いてぞ招きける。

判官、後藤兵衛実基を召して、

「あれはいかに。」と宣へば、

「射よとにこそ候ふめれ。ただし大將軍矢面に進んで傾城を御覽ぜられん所を、手垂に狙うて射落とせとののはかりごととおぼえ候ふ。さは候へども、扇をば射させれるべうや候ふらん。」

と申しければ、判官、

「味方に射つべき仁は誰かある。」

と問い給えば、

「手垂多う候ふ中に、下野国の住人、那須太郎資高が子に、与一宗高こそ小兵で候へども、手利きで候へ。」

「証拠はいかに。」

と宣へば、

「かけ鳥などを争うて三つに二つは必ず射落とす候ふ。」

と申す。

「そればよべ。」

とて召されけり。

与一その頃はいまだ二十歳ばかりの男なり。赤地の錦をもつて、
 衽おおくび、いろへたる直垂ひたれに、萌黄もえぎにほひの鎧着て、足白あししろの太刀を帯は
 き、二十四さいたる截生きりふの矢負ひ、うす截生きりふに鷹の羽わり合はせ
 てはいだりける、ぬための鎬かぶらをぞ差し添へたる。滋籐の弓脇には
 さみ、甲かぶとをば脱いで高紐にかけ、判官の御前にかしこまる。

「いかに宗高、あの扇を真中射て、敵に見物させよかし。」

「つかまつらうとも存じ候はず。これを射損じ候ふほどならば、
 ながき味方の弓矢の御きずにて候ふべし。一定つかまつらんずる
 仁に、仰せ付けらるべうや候ふらん。」

と申しければ、判官大きに怒つて、

「鎌倉を立つて、西国へ向かはん人々は義経が命を背くべからず。
 少しも仔細を存ぜん人々はこれよりとうとう鎌倉へ帰らるべし。」

とこそ宣ひけれ。

与一重ねて辞せば悪しかりなんとや思ひけむ、

「さ候へば、はづれんをば知り候はず。つかまつてこそ見候はめ」
 とて、御前をまかり立つ。

黒馬の太うたくましきに、まろぼやすつたる金覆輪の鞍置いて
 ぞ乗つたりける。弓取り直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩
 ませる。

御方のつはものども、与一が後ろをはるかに見送つて、

「一定この若者仕らんとおぼえ候ふ。」

と申しければ、判官もよに頼もしげにぞ見給ひける。

矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段ばかり打ち入れたりけれ
 ども、扇のあはひなほ七段ばかりはあるらむとこそ見えたりけれ。

頃は二月十八日、酉の刻ばかりの事なるに、折節北風はげしくて、
 磯うつ波も高かりけり。船はゆり上げゆり据ゑただよへば、扇も
 串に定まらずひらめいたり。沖には平家、船を一面に並べて見物
 す。渚には源氏、轡くつばなを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴
 れならずといふ事なし。

与一目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、別しては我が国の神明、日光権現、宇都宮、
 那須湯泉大明神、願はくはあの扇の真中射させてたばせ給へ。こ

れを射損ずるほどならば、弓切り折り自害して、人に二度面ふたたびを向かふべからず。今一度本国へ帰さんと思し召さば、この矢はづさせ給ふな。」

と心の内に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにぞなつたりける。

与一鏑を取つてつがひ、よつびいてひやうど放つ。小兵といふぢやう、十二束三伏じゅうにそくみつふせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、あやまたず扇の要際一寸ばかりを射て、ひふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。

皆紅の扇の日出だしたるが、夕日の輝いたるに、白波の上にあだよひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、舷ふなはたを叩いて感じたり、陸くがには源氏、簾えびらを叩いてどよめきけり。

本によって原文とは少し違う言葉が使われています。

朗読しやすいように行換えをしています。(洲浜)